取手アートプロジェクト2008に行ってきました

会期――2008年11月1日(土)～16日(日)の金・土・日・祝
会場――取手井野団地・キリンビアパーク取手ほか茨城県取手市内各所

取手アートプロジェクトは、1999年より取手市民と取手市、東京芸術大学の三者が共同で行っているアートプロジェクトです。10年目を迎えた今回、会場に選ばれたのが、1969年に建てられた取手市内最大のUR賃貸住宅、取手井野団地。UR都市機構は、イベントの趣旨に賛同し、会場の提供という形で協力することになりました。アーティストは団地内で生活し、団地にお住まいの方々と交流をはかりながら制作を進めていきました。

ゲスト・アーティストは、建築家ユニットや演劇ユニットなど、ジャンルの異なる4組。そのほか、韓国・安養(アニャン)市との国際交流プログラムに参加する6組と公募で選ばれた13組のアーティスト。団地内には、アートが点在し、お住まいの方々は、世代を問わずアートに触れ合いながら、イベントを楽しんでいました。

ゲスト・アーティスト

著名なアーティスト4組が参加し、団地ならではの要素に注目した作品を制作。それぞれの作品によって、団地に新たな視点を加え、魅力を引き出しました。

みかんぐみ　「Cafe Tappino」

建築家ユニットの「みかんぐみ」が手がけたカフェは、もともと銀行の出張所が入っていたスペース。閉店して使用されていなかった空間を有効活用しようと企画されました。

上／取手アートプロジェクトのテーマカラーである水色をアクセントに。カフェには、多くの来場者や団地にお住まいの方々が集い、憩いのスペースに　左／カフェのテーブルは、団地の模型になっている。模型の団地の灯かりが、テーブルの照明がわり

Port B　「団地大図鑑」

演劇ユニットの「Port B」が、敷地内の最も北側の団地の1室で、空間全体を利用した展示を行いました。団地内で多くの集団が生活している、その様子を表現しています。

左／団地全体を見渡すことができるのぞき窓が設けられている　上／団地内の風景を切り取った写真で構成された展示

鈴木勲　「廃食油カー、団地巡礼の旅」

取手井野団地にお住まいの方々や市内の小学校から集めた廃食油でバイオ燃料を作り、専用車に給油しながら取手市と韓国の安養市を往復するプロジェクト。旅のライブドキュメントを、写真と映像で紹介していました。

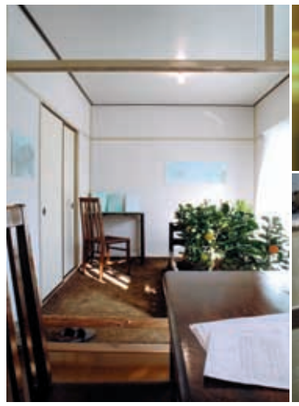
団地の一角に張ったテントの中には、3000kmに及ぶ旅の道中の様子がわかる映像と写真を展示

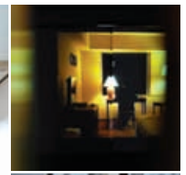
国際交流プログラム

韓国の「Seoksu Art Project＊」と日本の「取手アートプロジェクト」が交互にアーティストを3組ずつ派遣し、アートプロジェクトの交換を行うプログラムです。

＊韓国・安養市にある石水(Seoksu)市場を拠点として展開されるアートプロジェクト

金沢寿美　「1111さん」





在日韓国人3世として日本に生まれた作者が、外国人登録の第1号である登録番号「1111」の架空の男性を想像しながらつくり上げた空間。団地の1室に架空の暮らしぶりが再現されました。

右上／作者が「1111」さんの故郷である済州島を訪れ、旅先のホテルで「1111」さんに手紙を書いているという設定の映像が上映されている　右下／窓には、外国人登録番号をイメージさせる数列をセロハンで貼っている　左／韓国、済州島のミカン畑をイメージした空間

公募選出アーティスト

公募で選出されたアーティスト13組が、取手井野団地に滞在しながら作品を制作しました。独自の感性を巧みに表現した作品が、さまざまな場所で展示されました。

奥中章人　「world-danchi」「world-grass ground」

一本の針金を巨大な球体に編み上げた作品。球体の中に入ることもできました。針金を編んでいく過程での、お住まいの方々との触れ合いを大切にしたそうです。

上／メインとなる球体の作品のほか、赤銅色に錆びた針金を編んだ作品も点在している　右／作者の奥中章人さん。「ここで編んでいると、自然と子どもが集まってくるので、楽しく制作できました」

奥健祐＋鈴木雄介　「井野団地足湯プロジェクト」

団地の公園横にある、小さなプールを足湯に変身させ、「季節はずれのプールに人が集まる風景」をつくるプロジェクト。無料で利用できる足湯は団地内の新しい憩いの場となっていました。

夕方になると、学校帰りの子どもたちや近隣の方なども集まってくる。湯は給湯器で沸かす

吉永ジェンダー　「取手ジャンププロジェクト」

自分をモチーフにした作品を多く手がける作者が、取手を舞台にジャンププロジェクトを手がけました。会期前から、団地内のあちこちにジャンプポーズの作者の写真が貼られていました。

左／作者自身をモチーフとした絵や、ジャンプ姿を模したモビールなどが飾られている　右／閑静な団地の中で、紅白の市松模様の壁が目をひく。左下の小さなアーチをくぐると、カラフルな空間が広がる

生意気　「kinkymuffland 4」

海外出身のクリエイティヴユニット「生意気」は、いつ、どんな天変地異が起こっても、食べ物があれば何とかなると、フードジャングルをテーマに屋内外で作品を制作しました。

上／屋外には、取手に多く自生していた竹を使ってドーム型のオブジェを制作。柿などの果樹や豆類などを植えている　右／メガネをかけた案山子(かかし)を立て、柿の実には目玉のシールをつけた。遊び心の感じられる作品

団地にお住まいの久保さんからのComment

僕も制作に参加しました！

「生意気」さんの滞在していた部屋の近くに住んでいたので、いつの間にか親しくなり、作品づくりを手伝わせてもらいました。アートに触れ合え、豊かな気持ちで過ごせました。

齋藤芽生　「異野団地表彰状」「異野団地遺失物係」「四畳半みくじ」

幼い頃、団地に住んでいた記憶をもとに、名もなき市民が住んでいたと想定して部屋を制作。団地の規格化された間取りの中で繰り広げられる、多様な人間模様を表現。独自の祝祭性を組み合せた幻想的な空間です。

上／日常で起こるささいな出来事や、暮らしの中の小さな努力を讃える表彰状をディスプレイした「異野団地表彰状」　下／女性の情念を赤で表したという「四畳半みくじ」の部屋は、窓にも旗をディスプレイ